

人と組織の  
新・論・点

CATALYST\*

カタリスト

茂山千三郎

最新の情報や現代の風刺を取り込み、古典の魅力を広げる大蔵流狂言師

変化を少しずつ  
消化し伝統を重ねる



狂言の作品は「古典」と「新作」に分けられます。古典作品というと古い様式や台詞など、難解なイメージを持たれる方が多いですが、私は古いという意味ではなく、現在まで受け継がれて「スタンダード」になった作品だと捉えています。新作はその名の通り新しく書かれた作品のこと。『濯ぎ川』や『彦一ばなし』という作品は、戦後に書かれたもので古典に比べれば歴史が浅く、新作と呼ばれています。茂山家で頻繁に上演しているので、私はスタンダードと呼んでもいいと思います。

何百人もの手を経て  
新作はスタンダードへ

私も『だんご<sup>ごこ</sup>髻』や『都わたり』など、いくつか新作の脚本を手掛けています。2005年には、「愛・地球博」で『流れ星-X』という作品を初上演しました。今よりもさらに温暖化が進んだ2055年が舞台です。地球から移住できる星を探して宇宙の流れものになった地球人が、温暖化を回避する装置「ホ

シヒエル」を見つけ、なんとか地球に持ち帰るため、宇宙人とシューティングゲームで戦う物語です。未来と宇宙をイメージし、キラキラした衣装や、小道具に携帯電話も使いました。「やり過ぎちゃうんかな？」とも思いましたが、好評を得て、多くの環境団体から上演要請を受けています。

これからもっと新作を書きたいと思いますが、自分の名前が作品につかなくていいと思っています。これは著作権の問題で、現状は著作権料を支払わないと他の人が書いた新作を自由に演じられません。ですが様々な人の手によって演じられないと、作品は書いた人間だけの世界観に留まってしまう。新作は、何十人、何百人の手に触れられることで、少しずつ変化し研ぎ澄まされて、スタンダードとなるのです。

私が書いた新作がスタンダードになるかどうか、次世代の狂言師が受け継いでくれるかは、わかりません。ひょっとすると「ホシヒエル」が開発されて環境問題がなくなり、地球環境を危惧する風刺

が必要なくなるかもしれません。

狂言の変化、進化を  
100年の視点で見守る

室町時代に狂言が発祥してから650年。多くの作品が生まれ、今も演じられるものもあれば、消えていったものも数多くあります。狂言は古典芸能ですが、何一つ変わることなく代々、型や台詞を受け継ぎ、古典を残すことに専念してきたわけではありません。時代の流れに合わせ、少しずつ変化する台詞や型、新しい演出などを消化し受け入れてきました。私たちはその流れを無理に止めてはいけないと思うのです。

それぞれの時代の狂言師がその時の環境や風俗を取り入れて演じ、その次の世代の狂言師が、その変化を少しずつ受け入れ消化することが大切。微妙な変化や進化の積み重ねが伝統になるのです。狂言をこれからも伝承し続ける秘訣は、変化を急ごうとせず、100年単位の長い視点で物事を捉えることだと思います。

文/牛久珠理(編集部)

PROFILE しげやま・せんざぶろう

大蔵流狂言師。1964年生まれ。四世茂山千作および三世茂山千作、叔父二世茂山千之丞に師事。67年『葉平餅』の童で初舞台。99年京都府文化奨励賞受賞。「TOPPA!」(05年終了)を主宰する他、海外公演、ラジオのパーソナリティ、ミュージカル・オペラの演出・出演など幅広く活躍する。